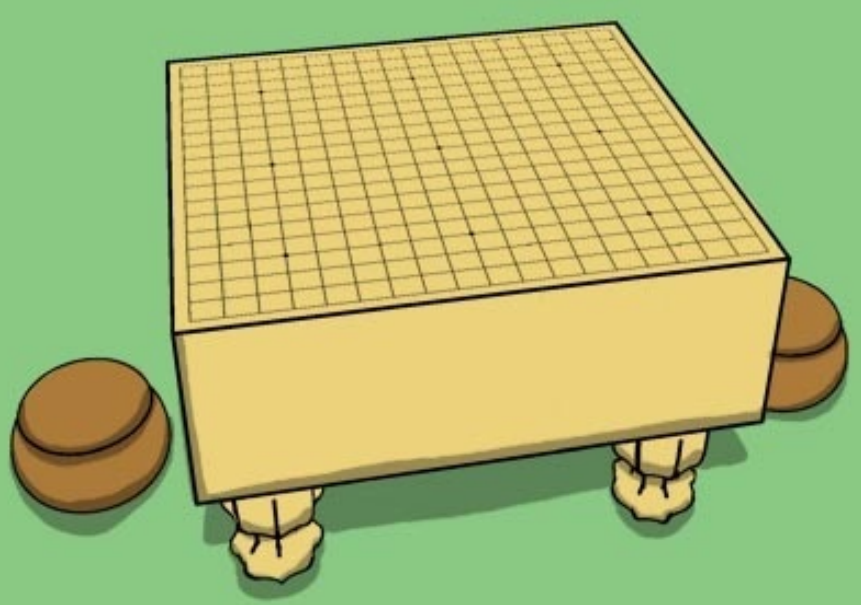


# 聴かずがしつくならオムニコープン



今の世の中には、オンリーワンという大変便利な考え方がある。ナンバーワンになれなくてもよいのだ。この考え方で気が楽になった人もたくさんいるのではないだろうか。少なくとも私の場合は何かあるたびにこの考え方のお世話になってきた。しかし、本当にそれで良いのか、と思うことはないだろうか。

私が囲碁棋士である張栩氏の著作「勝利は10%から積み上げる」を衝動的に購入したのは、私が囲碁を趣味にしているからというのももちろんあるのだけれど、それ以上に、本の帯に書かれている「弱いことは恥ずかしい」という言葉に惹かれたのが原因だった。そして、氏の勝負哲学について書かれたこの本は、内容も良かったのだけれど、やはり私にはこの言葉が一番心に響いた。

もちろんこの言葉は、囲碁という勝負事を仕事にする著者だからこそ書けることであって、我々のような凡人に当てはめるべきものではない。もし私が「弱いことは恥ずかしい」なんて言ったら確実に叩かれるし、それ以前に私自身が毎日毎日恥ずかしがらなければならない羽目になる。私は碁会所3段とはいえ、まだまだ弱いのだから。それに囲碁に限ったことではない。仕事面でも人間関係でもなんだか自分は他の人より弱い感じだから、恥ずかしいことばかりになってしまう。

そんな状態だから、私はこの本を読むまでは、先に書いたオンリーワン思考で何とかやり過ごしてきた。どんなに囲碁で負けても、どんなに仕事や人間関係でうまくいなくても、この年齢で、この顔で、こんな性格で、こんな趣味を持っている人間は自分しかいない、すなわちオンリーワンだ、だから弱くてもいいのだ、というふうに考えて自分を支えようとしていた。まあそれで支えられたのだから良いことには違いない。少なくとも、支えきれなくなってつぶれてしまうよりは良い。けれど、この本を読んで、本当にこのままで良いのだろうか、とも思うようになった。

確かにオンリーワン思考そのものは、別に悪いものではないと思うのだ。けれど、例えばその辺に転がっている石ころだって、ある意味オンリーワンである。石ころならばそれほど周りには迷惑をかけないからまだ良い。極端な話、犯罪者だってオンリーワンなのだ。人間として恥ずかしいことをしている人だってそれはそれでオンリーワンなのだ。結局突き詰めれば、世の中のありとあらゆるものがオンリーワンなのである。こんなふうに考えると、オンリーワンならよいのだ、という考え方が少し違うような気がしてこないだろうか。

それでもそのままで良い、という人だってもちろんいるだろう。私だってこんな疑問を書きながら、一応自分の中では、このままで良いのだ、と思おうとしている。けれど、その自分の姿が、少なくとも自分で褒めることの出来るオンリーワンであるかどうかを見直すことは大切ではないだろうか。

この本の著者の場合は棋士になるために苦しい修練を積んできた。著者が苦しんでいた時代に、私の場合はのんびりだらだらと過ごしていた。もし自分がその頃にもっと何かをがんばっていたら、なんて思わなくもないけれど、でもそれは別に良いのだ。それくらいはオンリーワン思考で許すことが出来る。問題は今だ。今私は、著者が囲碁の世界で戦っているのと比べて、どれくらい戦っているだろうか。恥ずかしいと思えることがあるだろうか。何かを目指してまっすぐがんばっているだろうか。

人間として著者のように強くなるのは、これまでだらだら生きていた自分にはもはや不可能だろう。だからそんな弱い自分をオンリーワン思考で慰めるのは許そうと思っている。というかそうしないとやっていけない。けれど、少なくとも、恥ずかしくないオンリーワンになりたい。この本を読んで、私はそんなことを思ったのである。